

今朝朗読された聖書には、パウロが捕らえられたようすが報告されています。パウロはエルサレム教会のヤコブや長老たちから勧められて清めの儀式を 4 人の人たちと一緒に受け、その清めの期間も終わろうとしていたのですが、パウロのことをよく思わない外国から来たユダヤ人たちによって扇動された群衆によって捕らえられたのです。逮捕の理由は、パウロが異邦人を入れていけない神殿の境内に連れ込んだ、というものでした。エルサレムの神殿には異邦人が入っていないゾーン・領域と、入ってはいけない領域とがあり、厳しく守られていました。しかしそんなことはパウロはよくよく知っていたでしょう。単なるぬれぎぬなのか、言いがかりなのか、実際パウロがそのようなことをしたのか、わかりません。いずれにせよ、エルサレムにはユダヤ教徒はもちろん、ユダヤ人キリスト者の中にも、パウロに敵対する人々が実に多くいた。敵対まで行かなくても、パウロという奴は気に食わんと思う人々も少なからずいて、しかもそこに野次馬的な群衆も加わり、パウロを捕らえると、リンチを加え始め、パウロ逮捕は騒然とした中、大ごとになっていきました。

この騒乱を聞きつけ、エルサレムを統治するローマの千人隊長が兵士とがやって来て、事態を鎮圧し、リンチをやめさせ、パウロを鎖で縛り、群衆からようすを聞こうとしました。群衆はあれやこれやと騒ぎ立て、千人隊長は様子が変わらぬまま、とにかくパウロを兵営に連行しようとし、途中、民衆の中には「その男を殺してしまえ」と叫ぶ人までいました。

パウロは兵営に連れていかれる途中で、千人隊長に自分の方から語りかけます。すると千人隊長はパウロがギリシア語が話せることがわかり、自分が思っていた最近反乱を起こしたエジプト人ではないのか、と尋ねてきました。そこでパウロは自分はユダヤ人であり、タルソス市民であることを自己紹介し、逆に自分を逮捕し、リンチを加えようとした群衆に向かって、話がしたいと千人隊長に依頼し、それが認められ、ヘブライ語で語り始める、それが今日の聖書個所に報告されていることです。

パウロがエルサレムに行く、ということは困難というか、争いごとに巻き込まれていくことが必至でした。周囲の人たちも、止めるべきだと言ったのです。しかしパウロはわかっていて、エルサレムに行きました。パウロはたくさんの

手紙を書いた人ですが、その手紙の中で、自分は異邦人伝道のために神の恵みを受けて遣わされたのだ、ということを繰り返し書き、事実異邦人伝道のために働いてきたのです。そのパウロがこうまでしてエルサレム教会、ユダヤ人にこだわる理由についてはいろいろなことが考えられます。ユダヤ人の多くはイエス・キリストを救い主として受け入れなかったけれど、神の意志は、ユダヤ人も異邦人も共にイエス・キリストによって救われることだ、とパウロは知らされてきたのです。彼は異邦人と共に聞いてきたキリストの福音に、エルサレム教会の人たちとも、さらに多くのユダヤ人とも、共に聞きたいと切実に願っていた。

しかし。そうだとすると、なお、わたしたちはこうして使徒言行録を読み進んで、パウロが困難の中にあえて足を踏み入れていくのか、本当のところ、わからないのです。実際パウロはこの後、2年もの間監禁状態に留め置かれるのです。あんなにもローマに行って伝道したいと願っていたのです。今ここで足止めされて普通に考えれば悔しい思いを満たされる。だがパウロは苦しみを受けることを承知でエルサレムにやってきた。今朝は、ご一緒にパウロの信仰に思いを馳せたいと思います。確かに、パウロが困難を承知でエルサレムに行ったのは、彼の成育歴や人となり、も大きくかかわっていると思います。しかし、それに遥かにまさって、パウロ自身の信仰、ということがあったと思います。信仰といってそれは正確には彼を活かし続けたキリストの信実、と書いていいことだと思います。このパウロの信仰に、わたしたち思いを馳せたいと思うのです。

パウロはガラテヤの信徒への手紙2章でこういう言葉を書き記しています。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」。これはパウロという人の信仰の根幹にあったことで、パウロがキリストの福音に出会い、それによって起こったことを表現した言葉です。だから、パウロは手紙の中で、このことをくりかえし書いています。「ただイエス・キリストへの信仰によって」、というのはいつも申し上げるように、イエス・キリストのまことによって、ということですが、義とされる、とはどういうことでしょうか。義とされるというギリシア語は普通には法廷用語、無罪判決を得る、というような意味なのですが、パウロが「義とされる」という場合、罪人に対して、あなたは無罪だよ、というだけのことではない。パウロは「義とされる」という言葉を、変えられること、という意味で使っています。しかもそれは、AのものがBに変えられる、というのとは違って、AはAのままなのだけれど、一

つの領域から別の領域に移される、場の移動、そういう変えられる、という意味で使っています。律法の下から恵みの下へ移される。滅びの場所から救いの場所に移されること、そういうふうに変えられるのです。

シンデレラといういろいろな国でそれぞれ伝承されているお話があります。あのお話の中で、シンデレラは継母とその連れ子によっていじめられる。連れ子の姉妹たちはきれいな洋服を着てすごしているのに、一人シンデレラだけは毎日みすばらしい服で掃除や洗濯ばかり。ある時王さまの宮殿で舞踏会があり、継母と連れ子たちは出かけていくが、シンデレラには洋服もなく、舞踏会にも行けない。しかしシンデレラは不思議な力によって舞踏会へ行き、王子によって見初められ、いろいろあるのですが最後には王子に見出され、お妃となって、王宮で暮らすという話です。

うつされるのです。いじめられ、虐げられ、苦しみを受けていた場所から、王子によって愛される場所に。シンデレラの話は、うつされる物語です。

パウロは、イエス・キリストのまことによって、自分という存在がうつされた、という経験をするのです。それは、自分の力によるものでは全くない。自分は相も変わらずの自分なのです。相変わらず罪人でもあり、驕りがあり、神にたいしてもまことの謙遜には程遠い。しかしキリストのまこと、キリストの信実、十字架と復活によって、移される。いったいどこへ移されるかと言えば、パウロの言葉で言えば、キリストの体の一部へと移される、ということです。神の子とされ、キリストを着るものとされ、キリストと一つになる、のです。シンデレラがこれまでの家ではなく、自分を愛してくれる王子さまの王宮と一緒に暮らし始めたように、わたしたちの住まいはキリストのうちになるのです。最終的には、つまりキリスト再臨の時、終末の時には、神とキリストとわたしたちは一緒に住む、そのことが始まっていく、とパウロは言うのです。まだ目には見えないし、顔と顔を合わせているわけではない。しかしキリストはわたしたちを自分一人で自分の力で生きようとしていた場所から、キリストの恵みの中で、キリストに生かされる場所に移してくださっているのです。それがパウロが受けた信仰です。与えられた信仰です。それはわたしたちの力ではない。わたしたちの努力によるものでもない。だからこそ、パウロはそれをユダヤ人にも伝えたいのです。律法によるのでもなく、ユダヤ人だけが神に選ばれているという誇りによるのでもなく、ただキリスト・イエスのまことによって救われて、義とされている、移されている、ということを伝えたいのです。

わたしはいま東京に住んでいる。わたしは今これこれの家族と、これこれの社会的なポジションや、あれこれの関係の中で生きている。わたしは一人の罪

人として生きている。こういうことを考え、こういうことを理解したつもりになったり、大した中身もないが、中身のようなものを抱え込んで生きている。それがわたしだと思っている。だがパウロがキリストの福音に出会って、回心した、信仰を与えられたということは、そういう自分の全部が根こそぎうつされた、ということです。根底において移された。恵みの中に、キリストのからだに、キリストのいのちの中に。だからわたしの中身だったり、考えていることが変わっても、いわんや社会的なポジションや他人との関係がたとえ大きく変わっても、移された場は何ら変わらない。死に至るまで、そして死んでも、死後も変わらない。これがキリスト・イエスのまことによって義とされた、ということの中身です。

パウロは周囲の人々の反対を押し切ってエルサレムに来た。そして多くの敵対者によって捕らえられ、ローマの官憲までのりだしてきて、これ以後拘留されることにもなる。自由も奪われ、踏んだり蹴ったり。しかし、パウロはそうまでしても伝えたい福音があった。自分が異邦人伝道に使命を与えられているけれど、同胞であるユダヤ人に、この福音を伝えずにはおられなかった。と同時に、捕らえられ、拘束されても、自分はキリストによって移されているという自覚は何一つ変わらなかった。自分一人で、自分の力で、自分の罪の中で生きてきたあの場から、キリストの恵みの場へ、キリストの中で生かされる場へと自分はうつされてきた、という信仰、キリストのまことによる信仰はいよいよ確かなものとされた。

キリストもまた、自らエルサレムへの道を歩まれ、苦しみを受け、歩んでいかれた。その根底には神の中にあるということがあったように、パウロはうつされている自分をこの苦しみの中でも受けとめていた。受けとめていた、というよりも、移されてある自分を生きていた。それは何があるかと奪われないもの。取り上げられないもの。パウロはうつされた場で生き活かされているのです。